

東西比較哲学の原点

松 尾 宝 作

一 比較哲学は近來ますます、その必要性を認識されつつある思想研究の新しい分野であるが、ここで当面する最も困難な問題は、東西の思想が公平に対話できる共同の広場がないということであろう。現代科学が大きく進歩しているように見えるのは、主として自然科学や技術面のことであつて、精神科学においてはその地盤が著しく荒れている。即ち「真理とは何か」「哲学とは何か」「宗教とは何か」「自由とは何か」というような根本問題になると何一つ東西に共通な定義がないのであるから、ここに比較哲学の地盤を求めることは不可能に近い。しかしこの困難を克服しなければ、すべての比較哲学も結局は水かけ論となり、学問の根本が、水かけ論に終るということは、即ち真理そのものを見失つていくことであるから、今日見られるような社会思想の混乱の原因は、学問そのものにあるといわなくてはならぬ。故にこの問題に対しては、何らかの対策が要求されることは当然であろう。しかしもともと比較哲学が意図されるということは、何

らかの意味で、すべての哲学は一に帰すべきであり、真理は一元的でなくてはならぬという暗々の自覚の結果であるから、もしヘーゲルやマルクスが主張するように、歴史に必然性があるか、または仏教の主張のように、人間の自覚に一定の発展段階があるものとすれば、この雑多の中に何らかの統一的秩序のあることは当然で、そのためには哲学全般に対する哲学の哲学というようなものが要求される訳である。しかし現在そのようなものは、どこにもないようであるが、私はそれについて注目すべきは、エンゲルスの発言であると考えらる。即ちそれは彼がフォイエルバッハ論に述べた次のような有名な言葉である。

「すべての特に近代の哲学の大きな根本問題は思惟と存在の關係に関する問題である。……何が根源的なのか、精神か、それとも自然か？……この問題がどう答えられるかによつて哲学者は二大陣営に分裂した。……」

エンゲルスのこの発言は、哲学の根本問題に対する極めて重

要な内容を含んでいる。故にこれを手がかりとして少しく考えて見ると、この有名な命題の内容は次のように三つのエレメントに分類できる。しかもこの三つは、東西を通じて人間思维の歴史的な発展段階を示すとともに、そのこと自体この問題解決のために大きな示唆を与えるものである。その三つのエレメントというのは、

思维と存在の關係……………①…認識論

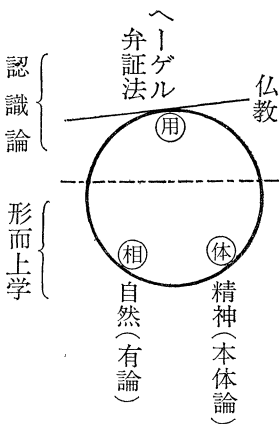
何が根源的なのか…〔精神か…②〕
〔自然か…③〕形而上学

ここに①②③と番号したのが、その三つの根本的立場である。②と③を形而上学とし、①を認識論としたことには少しく理由がある。この区別は、その始めの問いの形をよく見るとわかるので形而上学の場合は「何が根源的なのか」を問うのであるから、それ以前において「存在 $\equiv$ 在 $\equiv$ 」は既に認識されているので、もはや認識論の必要のない、極めて常識的な問いである。これは真理を実在と考える西洋思想の伝統的な考え方であり、また「有」を前提とする形式論理の必然の帰結でもある。しかしエンゲルスが無意識的に述べた「思维と存在の關係」の問題はこれと異なり、「存在 $\equiv$ 在 $\equiv$ 」とは何かという哲学本来の認識の問題であることに気付くであろう。これを仏教の立場から見れば深般若であり、観自在の問題である。しかしこの③②①は哲学の根本問題に対する相・体・

用の立場の相違とも考えられ、また正（—）反（—）合（綜合）の弁証法的発展とも見られ、更にヘーゲルのいう有論・本体論・概念論にも相当するもので、自然、精神及びその綜合として、人間思维の歴史的発展段階を示しつつ、内実的には一つの連関を保ちながら、三にして一、一にして三という非連続の連続の關係にあることが知られるのである。

二 ここで注目しなければならないことは、このエンゲルスの考え方によれば、西洋近代の哲学には形而上学だけがあつて認識論はなかつたことになるが、唯ヘーゲルだけは例外でその根本的立場はここのいう認識論であり、真理一元の立場に立つのであるから、この分類では仏教と同一の部門に属することは明らかである。

このようにエンゲルスの二者択一的な主張を「哲学の根本秩



題」の認識論に転換できるのは、エンゲルスの形式論理に対して、この同じ問題を弁証法的に解釈することによつて得られるもので、それによつてこの雑多な対立の中に、一つの秩序が発見できるのである。而してこの図形で見られるように、西洋近代の哲学はヘーゲルの弁証法の発見によつて、始めて仏教哲学と円に対する接線の関係をなすので、ここを比較哲学の原点とすれば、東西比較哲学の道は八方に開かれるはずである。しかし反対にこの弁証法的構造を無視すれば、西洋哲学の大勢をしめている形而上学と、ヘーゲルや仏教の立場である認識論とは、全く対蹠のかつ矛盾であるから、形式論理の立場に立つ限り、そこに東西比較哲学の地盤を発見することは極めて困難である。いまその対立点を示すと。

1	真理一元論	形而上学
2	超次元的	二元対立
3	弁証法論理	時間・空間的
4	在るとは何か (being)	形式論理
5	常識から哲学へ	それは何か (what)
6	向上門（宗）	教義的独断を含む
7	立場の自覚と自由	向下門（教）
8	真理は法則的	立場の無自覚
9	自由と真理は相即	真理は客体的
10	開かれた自我（無我）	自由は自然必然的
		閉ざされた自我

等があげられる。以上で明らかのようにヘーゲル哲学こそ唯一の東西比較哲学の接点であり、原点と考えられるが、それはまたエンゲルスの提言の必然的發展形態でもある。エンゲルスは、それを唯物論と観念論の定義と考えたが、一面から見れば、それは「哲学の根本問題」に関する一種の教相判釈であるがその範囲は西洋哲学に限られ、論理は形式論理である。しかし今日では東洋・西洋ともに弁証法が発見されているのであるから、新しい時代の学的教判には、弁証法の成果をとり入れなくてはならないことは当然である。

三 西洋思想史の中で、弁証法論理が形式論理とならんで、一つの論理として認められるまでには、極めて長い時間を必要とした。しかし弁証法は学的認識の論理であり、空（真無限）の自覚に到達して始めて成立するものであるから世界の文化の中でも普通の論理と弁証法論理とを、かね備えているものはそんなに多くはないが、その中でも仏教とヘーゲルの弁証法は、そのすぐれたものといひ得るであらう。しかし真理そのものは幾つもあるのではないから、われわれは仏教とヘーゲルの哲学を比較することによつて、弁証法そのものを正確に把握することが、今日の大きな課題であらう。それは今日弁証法は余りにも乱用され、混乱さえ生じているのであるが、理由は哲学を学ぶものが、哲学することを学ばないで、哲学を学ぶからではないだろうか。その傾向は特にわ

が国において著しいのであるが、民主主義の時代に學問だけが借ものであつていいというものではない。しかしてこの誤つた傾向を正し得る最良の方法は、比較哲学を早急にとり入れることでないかと考える。比較哲学は哲学を哲學することであり、自己の立場を確立することになるから、正しい比較哲学においてのみ、哲学は眞の哲學となり、自覚は眞の自覚となり得るのである。そのためには正しい立場と、正しい論理をもたなくてはならないことは当然である。

古来わが国には哲学がなかつたように主張するものもあるが、それは哲學の定義をどのように定めるかによるので、何でも西洋のものがすぐれているというような安易なことではない。日本に無かつたのは、むしろ個々に独立した有論であり、本体論ではなからうか。仏教は宗教として、平等面を余りに強張して差別面を輕視した。しかし弁証法は見た通り俗諦を内に含んだ真諦であり、俗諦がなければ真諦もないのであるから、むしろ日本に欠けていたのは、その全体から切り離された科学であり、形而上學ではなからうか。しかし真諦を自覚した上の俗諦は、切りはなされたままの俗諦ではなく、空（眞無限）の自覚をふまえた俗諦といひ得るから、そこに即非の論理が成立するので、それはもはや自己の立場だけが真理であると主張するような閉ざされた自己絶対でなく、哲學と宗教・宗教と科学をよく弁別した上で、互に自己

の立場をも自覚し、他の立場をも客認し得る広い一つの立場にまで開かれなくてはならぬ。哲學といつても決して人間の學を離れるものではないから、哲學を哲學する弁証法的世界觀は人間の立場であり、科學をも宗教をも非連続なものと見ず、これを止揚した非連続の連続として、互にその所を得る広い立場に立つものでなくてはならぬ。弁証法的世界觀（法界）は実体的でなく構造的・法則的であるが、現在のいわゆる形而上學に欠けているのはこの真理の一元性なのではなからうか。

私は今日の思想の混乱の原因は、哲學のよつて立つ根本を更に哲學することを忘れた學問そのものの在り方に問題があると考える。エンゲルスの提言は、この哲學の哲學ともいふべき哲學の根本問題を形式論理によつて哲學したものであり、それは当然閉ざされた自我の立場に立つものとなるが、しかしそこに定義せられている唯物論觀念論の區別は、今日なお多くの人々の承認しているものであるが、この同じ命題を弁証法的に解釈するとき東西哲學を含んだ新しい共同の広場が展開され、その到達点において比較哲學の原点が発見できるのである。出発点を異にした東西の哲學が、同一の目標地点に到達し得るところに、人間學の重要な秘密がかくされていると考へべきではないだろうか。